

日本現代中国学会 第 57 回 全国学術大会のご案内

ごあいさつ

実行委員長 松野 周治 (立命館大学)

日中国交正常化 35 周年の本年、日本現代中国学会第 57 回全国学術大会が 10 月 20 日(土)、21 日(日)の両日、立命館大学びわこ草津キャンパスで開催される。開催校で準備に当たっている実行委員会を代表し、会員各位の大会への積極的参加をお願いしたい。

大会の準備は西村成雄理事長を含む京阪神在住理事の協力も得て進められ、実務面では金丸裕一会員(実行委員会事務局長)が担当している。協議の結果、本大会の共通論題は「〈毛沢東時代〉を再審する——中華人民共和国 60 年の再認識」となった。同論題設定の趣旨については、宇野木洋理事が別途詳述しているので、参照していただきたい。個人の人生を 60 年で区切り「還暦」とする習慣があるが、個人がさまざまな関係、組織、団体を媒介に結合した国家に対しても、それを当てはめ、2 年後に成立 60 周年を迎える人民共和国について、再認識を試みようというものである。ただ、60 年全体を均等に扱うのではなく、鄧小平が主導する改革開放政策路線が展開されるまでの前半 30 年間、いわゆる「毛沢東時代」を主な検討対象とし、その中から 60 年をとらえ直す作業を試みようとしている。幸い、文化・思想、政治、経済(歴史)の各方面から、また、近年の国際学術交流の活発化を背景にして、中国からも報告者を迎えることができた。本学会の特色であり、「存在意義」である総合的、学際的接近・分析をフロアーからの積極的参加も含めて期待したい。

自由論題報告についても、興味深い多数の応募をえた。検討の結果、本大会では、報告テーマと対象時期を考慮して、第一分科会(中華人民共和国期)、第二分科会(民国史)、第三分科会(日中関係史)、第四分科会(文学・思想)を組織した。各分科会でも、充実し、活発な報告討論を展開したい。なお、本大会では、自由論題報告を土曜午前、日曜午前・午後配置した。共通論題の報告討論をできるだけ多くの参加者を得て展開したいとの趣旨であるが、従来とは異なる日程となったことについて、各位の了解を得たい。

会場である立命館大学びわこ草津キャンパスは、滋賀県・草津市との協力の下、1994 年に開設された新キャンパスであり、約 64.5ha の土地に、経済、経営、理工、情報理工の 4 学部、経済学、経営学、理工学、テクノロジーマネジメントの 4 研究科において約 1 万 7 千名の学生・院生が学んでいる。15 分間隔の電車で京都駅から 20 分の距離、駅前からのバスの便も良く、京都市内・衣笠キャンパスと比べてアクセスに遜色はない。是非、この機会に、豊かな歴史と文化の地、近江に位置する立命館大学の新キャンパスを訪れていただければ光栄である。

2007/09/07

共通論題 詳細プログラム

<毛沢東時代>を再審する—中華人民共和国 60 年の再認識

- 司会 宇野木 洋 (立命館大学)
- パネリスト 奥村 哲 (東京都立大学)・季 衛東 (神戸大学)・孫 歌 (中国社会科学院)

問題提起……宇野木 洋 (立命館大学)

2年後の2009年、中華人民共和国は建国「60周年」を迎える。——いわば「還暦」であり、しかも十干十二支を一巡りしたその「人生」が、波乱に満ちあふれたものだった以上、否応なく自らの「誕生」とその後の「生の営み」を、改めて見直さざるを得なくなるのではないだろうか。だとすれば、「新中国」建国を契機に結成(1951年)された本学会としても、2009年を展望しつつ、中国に対する「再認識」の試みを開始していく必要があると言えよう。

こうした問題意識に基づき、今年度の全国大会の共通論題を、「<毛沢東時代>を再審する」と設定する。そして、来年度の共通論題もこうした問題意識を継承いただき、例えば、「<鄧小平時代>を再審する——中華人民共和国 60 年の再認識(その2)」(仮題)と構想できれば、2009年度の全国大会においては、2007・8年度という2年間にわたる「再審」の取り組みを踏まえて、学会としての中国「再認識」に向けた、緻密かつ全面的な検討が可能になっていくに違いない。

なお、断わるまでもないが、今年度における<毛沢東時代>というタームは、前半の約30年間における事象のみを対象とするといった、編年的な枠組を意図しているわけではない。「問題点・論争点(issue)としての<毛沢東時代>」というニュアンスで用いているつもりである(<鄧小平時代>と設定する場合も同様となる)。例えば、20世紀末から21世紀初頭にかけて展開された、いわゆる「新左派」vs「自由主義」の論争において論点の1つとなったのは、「自由」と「平等」のジレンマ(単純化すれば、「市場」原理に象徴される「資本主義」的な「自由」の実現と、「マクロ的コントロール」による「社会主義」的理念としての「平等」の実現との間における模索など)であり、こうした問題群とは、まさしく<毛沢東時代>というタームによって照射されたとも言えるのである。種々のレベルにおける「格差」を克服し、社会主義市場経済に基づく「調和」社会を目指すという現在の課題も、まさにこの延長線上に存在するのではないだろうか。

こうした問題群を多面的に検討していくには、日本の研究者のみの意見交換では、自己満足に陥りかねない危険性もあるだろう。中国という「現場」での思考をはじめとする、異なる環境における新たな思考などとのクロスオーバーから、貴重な問題視角も生まれてくるに違いない。可能な限り、「国際シンポジウム」的な企画を実現しようと試みたことをも、ご理解いただければ幸いである。

現在、日本・中国ともに、席卷するグローバル化と新自由主義的思潮の下で、次元や顕現は異にしながらも、「格差」という言葉に象徴される諸矛盾に直面している。また、狭隘なナショナリズム的風潮も蔓延しており、日中関係にも看過できない影響を及ぼしている。その意味で、中国60年の歩みに対する「再認識」は、同時代の日本を「再認識」することにも繋がっていくのは明らかであろう。「還暦」を迎える中国が、「来し方」を踏まえて如何なる「行く末」を選択していくのか、刺激的な報告と活発な議論によって探っていきたいと考える。こうした問題意識を共有した上での多彩な角度からの積極的な研究報告と、共通論題「国際シンポジウム」における知的興奮に満ちた意見交換を心より期待したい。

歴史としての毛沢東時代……奥村 哲 (東京都立大学)

私が中国の社会主義体制を戦時態勢として捉えるべきだと主張し始めてから、今年で20年になる。今回の報告は、過去の著作(『中国の現代史』、青木書店、1999年。『中国の資本主義と社会主義』、桜井書店、2004年)を前提としつつ、できるだけ重複を避けるために、総力戦に

ともなう「強制的均質化」(Gleichschaltung) 概念を軸として、社会統合のあり方を中心に考えることにしたい。前史として、日中戦争期を対象とした笹川裕史氏との近著(『銃後の中国社会』、岩波書店、2007年)を、参照していただければ幸いである。

近現代の歴史は、「縦と横」で捉えられねばならない。縦というのは時間軸である。毛沢東時代については、これまでは1949年以後に限定してしまうか、遡った場合には延安時期などの共産党しか見ないか、逆に専制支配ということで一挙に前近代の帝政と直結させたりしてきた。しかし、歴史として捉えようとするれば、近現代の国民国家への動きの中、とりわけ日中戦争勃発以後における全体の流れの中に位置付けなければならない。

横というのは、同時代の世界の動きの中で捉えるということである。この場合、少なくとも、東アジアの冷戦体制を論理に組込まねばならないであろう。冷戦というのは、いつ「熱い戦争」になってもおかしくない緊張状態であり、東アジアでは中国も強く関与した2つの国際的な局地戦(朝鮮戦争・ベトナム戦争)が起こっている。歴史の子の一人である毛沢東や共産党も、そうした状況に強く規定されざるをえない。挑発的な言い方をあえてすれば、彼らの政策や動きをイデオロギーの実現、つまり社会主義・共産主義の理想(あるいは幻想)を求めたものだとするのは、あまりに牧歌的であろう。現在から見れば、当時使用された社会主義イデオロギーの概念の多くは、事態を解釈し説明するための言語でしかなかった、と理解すべきではなからうか。だからこそ、鄧小平の改革開放は脱冷戦の過程と絡み合っていたが、社会主義という語は、現在においても使われているのである。

最後に強調したいのは、「エリート史観」は克服されねばならない、ということである。過去の人民論、特に革命的農民像が崩壊した後は、総括がなされないまま無意識のうちに、「エリート」にのみ眼が向けられてきた。しかし、革命的であるか否かに関わりない、名もなき多くの人々が生き抜くためにさまざまに動いてきた。そうした膨大な営みの総和として、個々人の意図とは別に社会が変容していき、エリートも国家もそれに対応していかざるを得なかったと思われる。言うはやすく為すはあまりに難いが、努力してみたい。

中国的抵抗権の誕生—「造反有理」命題の多義性と再解釈……季 衛東(神戸大学)

法学の視座から毛沢東時代を観察すれば、「造反有理」と「法家路線」という二つの対立しあう側面を持ち合わせたことが注意に値する。かような反対補完の抽象的構築は、啓蒙による人間解放と紀律社会との逆説に関するM. フーコーの論調を連想させた点でとくに興味深い。

そこでは、単なる独裁、人治および権力闘争を超えた何らかの普遍的価値も存在すると言っておく。たとえば、孟子流の道徳主義的革命論(愛民の契機)と商鞅流の合理主義的社会工学(強権の契機)の短絡的な結合によって産み落とされた正統性の申し子のようなもので、深刻な内的矛盾を抱えながら、中国的秩序を根拠づけてきた原理である。

ところが、周知のとおり、いわゆる「文化大革命」の初期段階では、「造反有理」のほうがり独り歩きしていた。その足跡を追ってみれば、上層部権力闘争を行なうための動員装置、あるいは構造的硬直化を防止するための部分破壊メカニズムであることがわかる。しかし、カリスマ的支配と大衆路線の特殊な構造、あるいは「Mao-Mass」ループを通して、「造反有理」の命題は、新階級や官僚国家に対する抵抗の記号に化けたりしたこともある。後者の典型的な実例として、楊曦光=楊小凱の立場における過激な造反派から徹底的な立憲主義者への変遷が挙げられよう。

今やかかる抵抗の論理に対する社会的関心が、「新左翼」と「新自由主義」の論争によって再び引き起こされ、かつ政治改革の言説において自由の平等性、脱官僚制化、分配正義、个体尊厳、構造再編成のための相互作用、社会不正に対する異議申立などの主張とも共鳴している。ちなみに、解釈的転回を通して、ある意味で、現在の毛沢東像は、すでにナロードニキエ的造反精神の色彩を洗い落とされて、過酷な市場競争の守り札または市民権運動の記号へと居直りはじめたのである。

社会文化、社会思想における「文革」……孫 歌（中国社会科学院）

私には、真正面からの「文革研究」をやる力がない。本稿は、今日の中国社会から見られる「文革の痕跡」から、この大事件の歴史的な位置づけを考えるいくつかの初歩的な問題提起に止まる。

- 一、文革への「郷愁」は、どのような社会的雰囲気なのか。文革への「郷愁」は、改革が進んでから社会的に現れた現象である。それは90年代の後半に顕著になった。それは基本的に、都市社会の「下層部」を中心にした現象であろう。労働者の社会的地位の低下、上昇ルートの詰まりなどによって、「改革」に対する信任度を低下させられていた。競争の仕組みを導入することにより、文革中の社会制度が崩壊された。都市の改革と農村の改革の差異。
- 二、文革中の「主体」となっていた労農は、どのような主体性をもっていたのか。建国革命の基盤であった労農は、国家政権と繋がる地位が得られたが、その地位は文革中、特に前半は頂点となっていた。ただし、それは、(1) 労農階級は支配階級となることにはけっしてなっていない。(2) 政権への関わり方は政治性が足りない。「上に従う」という色彩が強すぎる。そのため、文革中には、「労農兵」の社会地位が確立したものの、労農的政治社会が形成されたとはいえない。
- 三、文革中の「知識人」や「知識」への抑圧は、いったいどのような政治構造に連動していたか。建国後から文革にかけて徐々にエスカレートする知識人に対する抑圧は、けっしてすべての知識人に対するものではないし、知識人だけに限ったものでもない。それは、社会統治システムに連動する基本的政治パターンである。

建国まもなく発生した朝鮮戦争への参加は、中国の運命を象徴した選択だった。冷戦に迫られ、資源も乏しい。工業化の基礎が弱い。国の独立を維持するための社会システムは、「自由競争」などの余裕がなかった。政治権力のコントロールによって重工業や農村インフラ整備を初歩的に完成したのは、文革が終わるまでの段階だった。

それと平行して、言論を厳しく統制し、行政の力で思想の「内面性」まで干渉するシステムも形成した。それを孤立した形では把握できない。

まとめ：文革は「改革」と対立したものではない。連続性がある。

今日の政治社会システムを観察するためには、文革が大いに参考になる。

「自由論題」詳細プログラムは、別紙「大会プログラム・大会概要」をご参照ください。

(ご案内 と お願い)

当日、会場の受付にて、以下のお支払いをお願い致します。

1) 大会の受付時に、「2008年度会費」の支払をお願い致します。

尚、それ以前の年度で、未納の分も、当日お支払頂きますようお願い致します。

2) 大会参加費は、1,000円です。

3) 「昼食弁当」は、1,000円で、事前予約制です。

4) 「懇親会」は、一般会員 5,000円、院生・学生会員 3,000円です。事前申し込みをお願い致します。

大会への「出欠」や「食事(昼食弁当)」・「懇親会」は、必ず「出欠ハガキ」でお申込み下さい。

メールでの案内後に、印刷された「大会文書」と「出欠返信ハガキ」が同封されて届きます。

(大会実行委員会事務局)

日本現代中国学会 理事会 開催案内

- 日時＝10月19日（金） 午後4：30 （大会の前日です）
 - 場所＝「立命館 孔子学院」会議室
 - *「アカデミア21」（「立命館大学国際平和ミュージアム」が設置されている建物）の2階です。
 - 注）立命館大学「衣笠キャンパス」に隣接した箇所です。
- （※大会開催の「びわこ・くさつキャンパス」ではなく、立命館大学の京都地区キャンパスです）

*「立命館孔子学院」事務室をお訪ね下さい。

- 大会への出欠ハガキの、「理事の方のみ」の「回答欄」に、出欠の確認を記入ください。
- 緊急連絡先＝090-1952-6860（宇野木 洋の携帯電話）
- *地図・交通・連絡先は、以下をご参照下さい。

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/cc/confucius/toiwase.html>



京都市北区等持院北町 56-1 立命館大学 アカデミア立命 21

（電車でののご案内）

- JR・近鉄京都駅より 市バス 50
- JR・地下鉄二条駅より 市バス 15・55
- 地下鉄北大路駅より 市バス 204・205
- 京阪電車三条駅より 市バス 15・59
- 阪急電車烏丸駅より 市バス 51・55
- 阪急電車西院駅より 市バス 205
- JR 円町駅より 市バス 15・204・205

（バスでののご案内）

- 市バス=15・50・51・55・59にて「立命館大学前」下車／徒歩 5分
- 市バス=204・205にて「わら天神前」下車／徒歩 10分

*お車でのご来場はご遠慮ください。

TEL 075-465-8426 立命館孔子学院 事務室

執務時間：火曜日～土曜日 9:00～17:30（昼休憩 11:30～12:30）

※日曜日、月曜日、祝日および夏期休暇（8月11日～18日）、
年末年始休暇（12月27日～1月5日）期間中は休業。